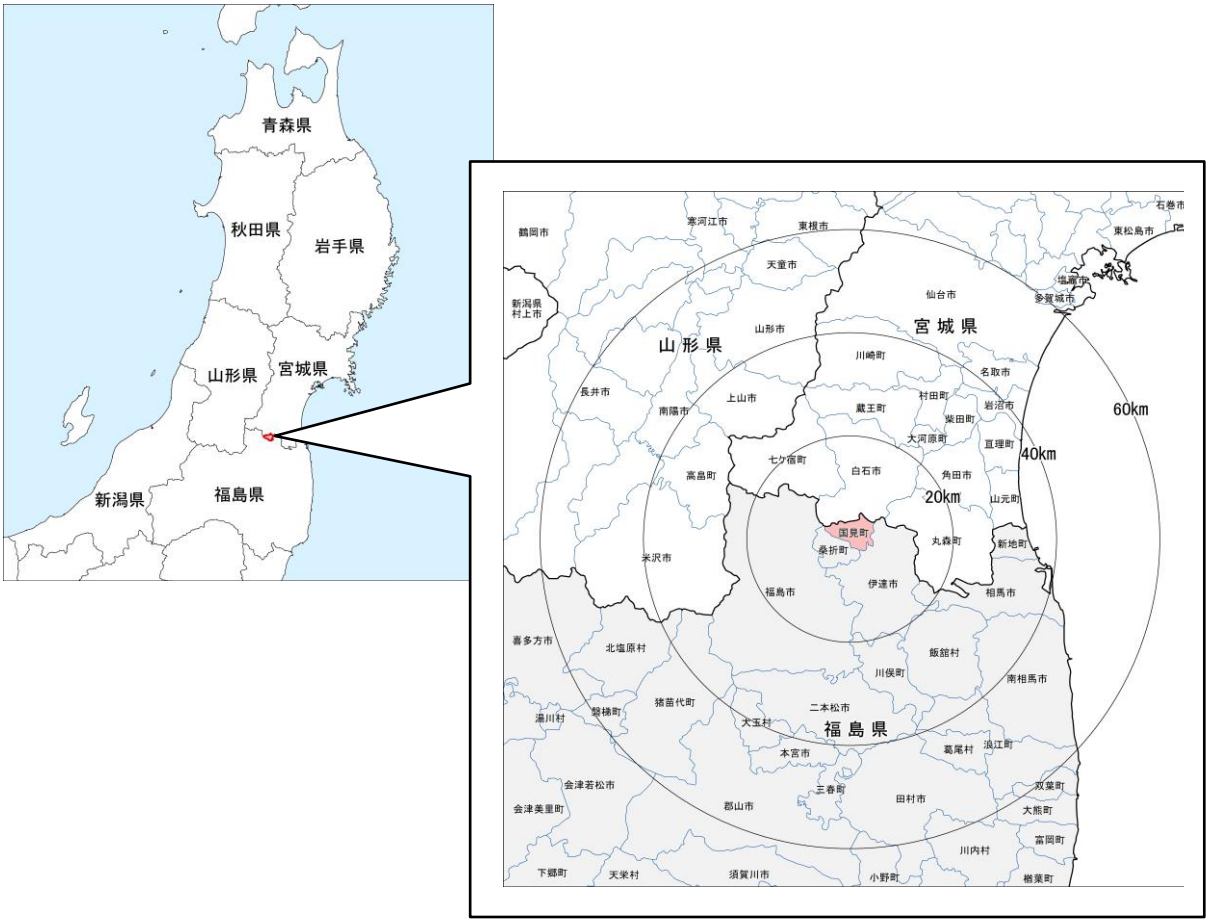
第１章　歴史的風致の背景

１．自然的環境

（１）位置

国見町は、福島県の中通り地方の北端に位置し、北は宮城県白石市に接し、東は阿武隈川を挟んで伊達市、南は桑折町と隣接し、県都福島市までは約 16.5 ㎞の距離にある。町内に残る「大木戸」の地名が示すように、東山道を通した白河関と並び、陸奥国への関門の地として重要な役割を果たしてきた。阿津賀志山の山麓には JR 東北本線、東北自動車道、国道４号などが縦走し、今も昔も交通の要衝となっている。仙台市、山形市、郡山市にはそれぞれ 60ｋｍ圏内であり、東西 9.8ｋｍ、南北 7.4ｋｍで、面積 37.9 ㎢となっている。



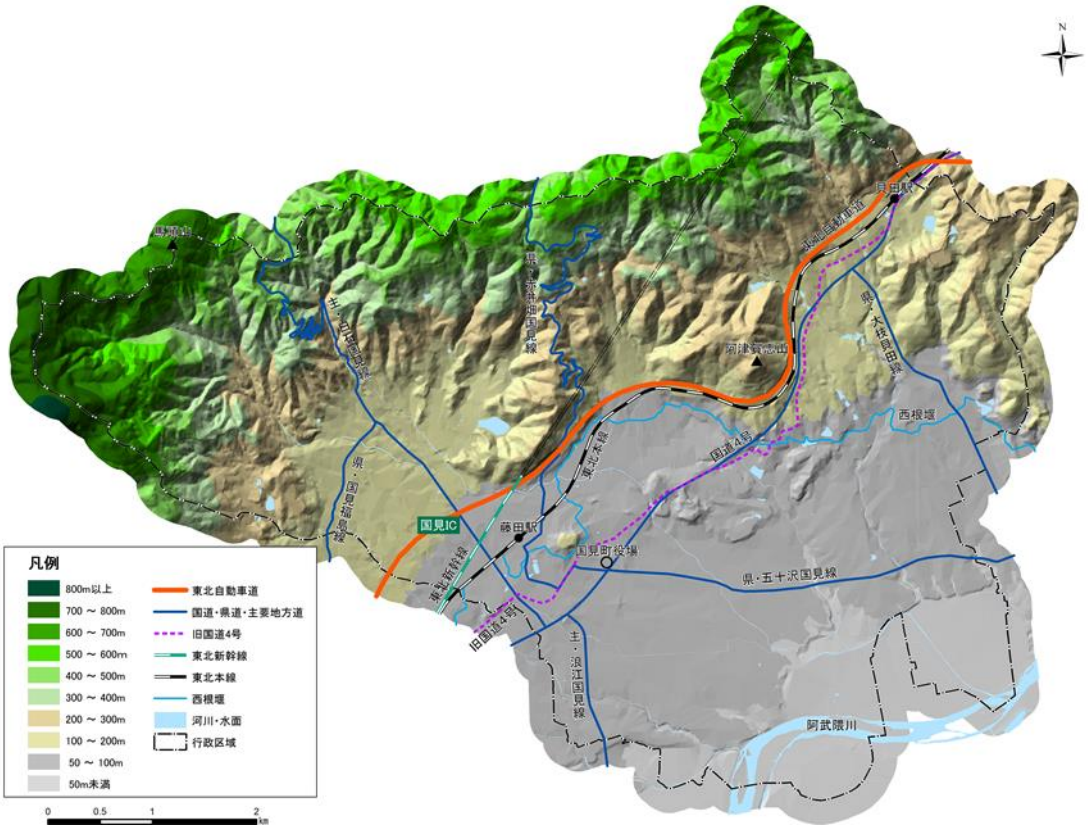
■国見町の位置

（２）地勢

本町は、奥羽山脈と阿武隈山地に挟まれ阿武隈川水系により形成された福島盆地（信達盆地）の北縁部に位置する。町の北西部には標高600～700ｍの山塊が連なり、白河から福島までの盆地が連なる中通り地方の北端を形成している。

山並みと平野部を持つ本町は、山麓斜面を含めた平地及び緩斜地が町面積のおよそ半分を占め、その大半は標高60～70ｍの台地状の平坦面である。阿武隈川に向けていくつかの小河川が山間から流れ、小さな谷を刻む。

貝田地区周辺では、山々に挟まれたわずかな平地に街道が縦走している。それを遮断するように、山並みから突出した阿津賀志山が存在している。古来より交通の要衝であり、陸奥国の奥玄関となる。



■国見町地勢図

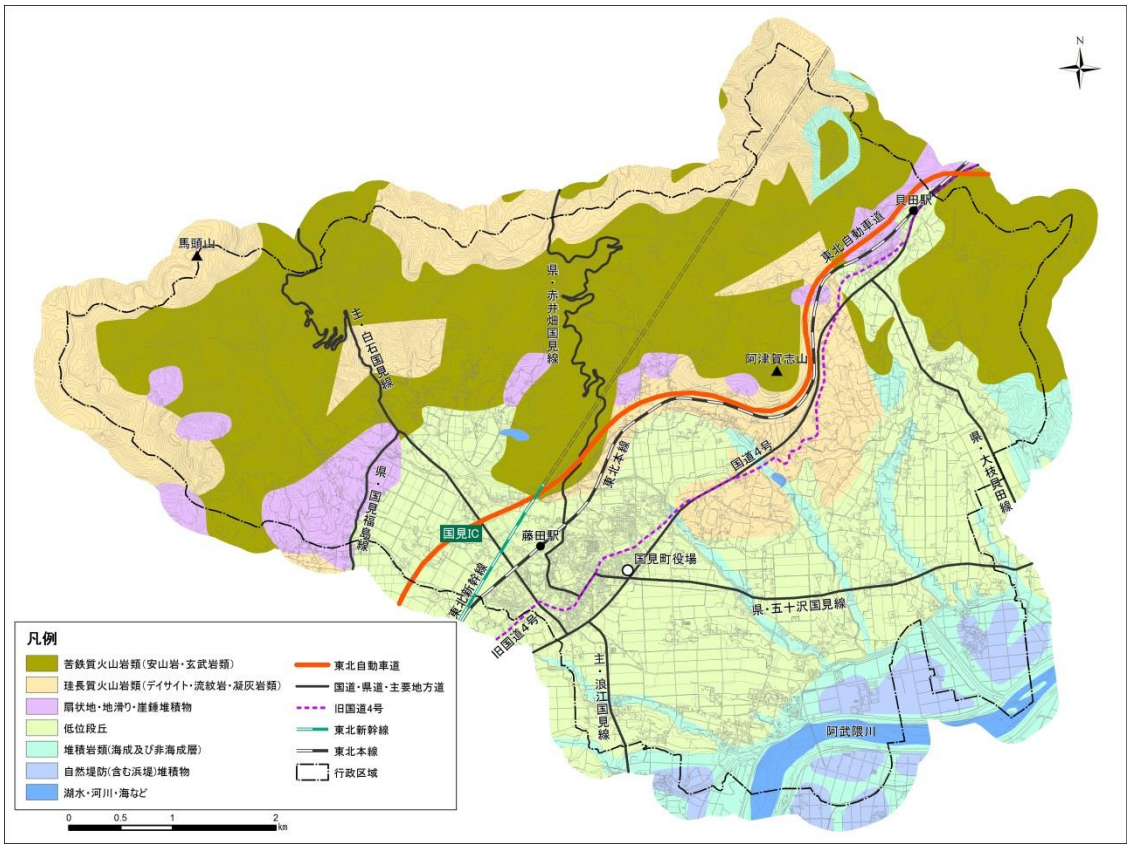
※この地図の作成に当たっては、国土地理院の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。（承認番号　平成26情使、第590号）

（３）地質

町の北西部にそびえる標高600～700ｍの山並みは、安山岩・玄武岩類の苦鉄質火山岩類で構成されている。その山麓斜面から平地への緩斜地では、堆積物が分厚い地層を形成する扇状地などと、珪長質火山岩類（デイサイト・流紋岩・凝灰岩類）が露出している箇所が存在する。

本町では古来より、凝灰岩の露頭した場所から採石された石材を様々な用途に使用し、大正期から昭和期には「国見石」として流通した。現在も町内には、豊富な石材資源と石工技術を反映した石蔵が広く分布している。

また平野部では、阿武隈川及び同水系の小河川により、堆積岩類と低位段丘・自然堤防が形成されている。堆積層には、風化した凝灰岩類に由来する粘土層が広く分布し、古代には土器材料として使用され、現在も農業の恵みを支えている。



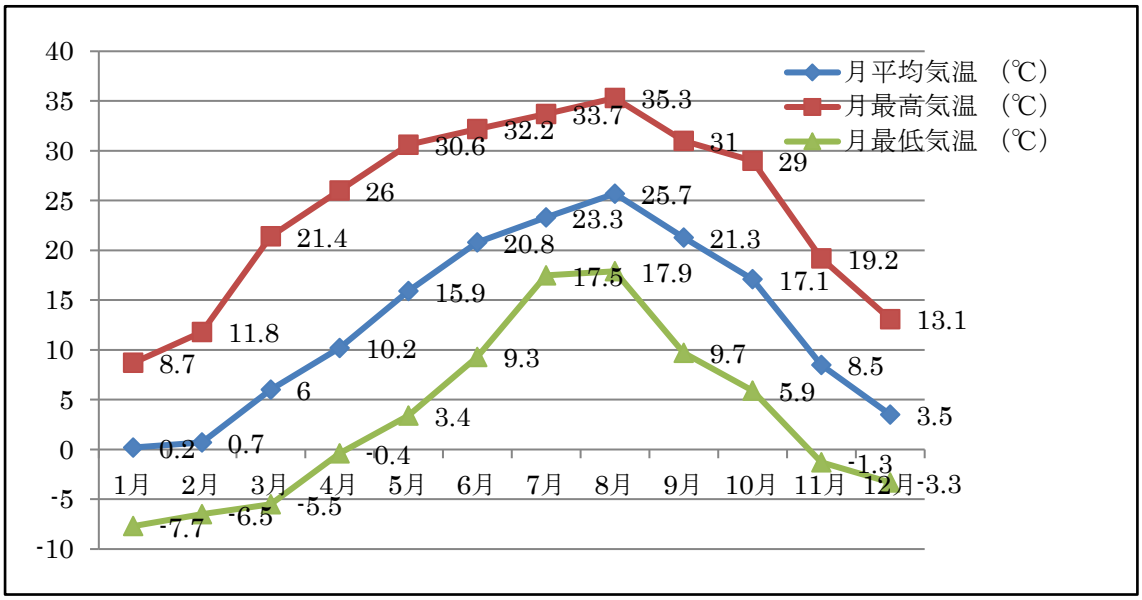
■国見町地質図

※産業技術総合研究所地質調査総合ｾﾝﾀｰ発行 20 万分の１シームレス地質図を使用した。（承認番号第60635130-A-20141215-001号）

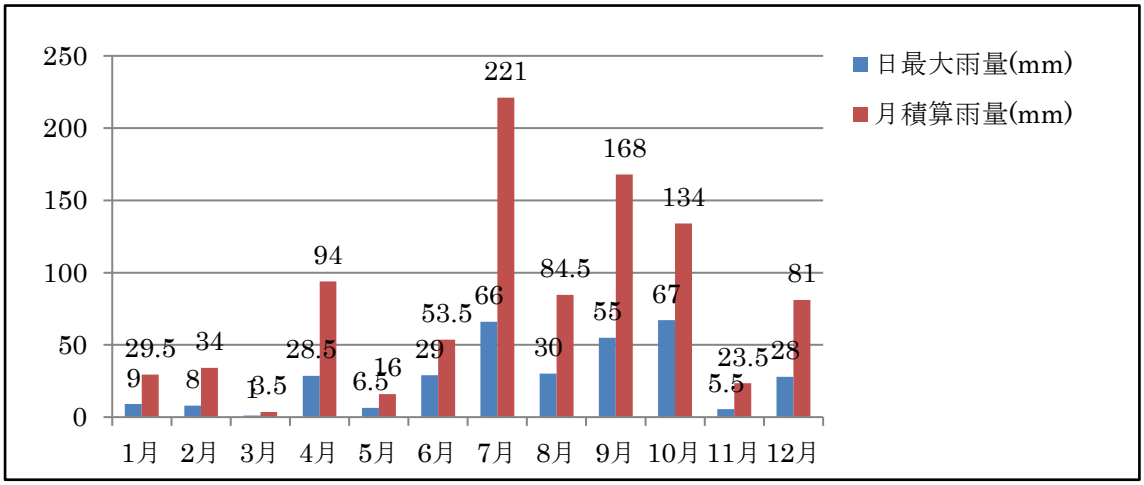
（４）気候

東西に広い福島県は、会津地方、中通り地方、浜通り地方と、気候も全く違う。会津地方は寒さが厳しく豪雪地帯となるが、浜通り地方は冬でも雪はあまり降らず比較的暖かい。中通り地方は南北に長いため、地域により寒暖差があり阿武隈川の西に位置する地区は雪が降りやすい。

本町は中通り地方の最北端に位置し、内陸性気候の特徴が混じった太平洋側気候である。年間平均気温は12.8℃で、７月から８月の夏期は、最高気温が35℃前後まで上がり、湿度も高く盆地特有の蒸し暑さが続く。一方で、12月から２月には氷点下７℃前後まで気温が下がり、降雪も中通り南部と比べると多いほうである。年間降雨量は、900㎜～1,000㎜で雨量は少ない。



■月別平均気温・最高気温・最低気温(単位:℃)　【出典：平成 25 年国見町気象データ】

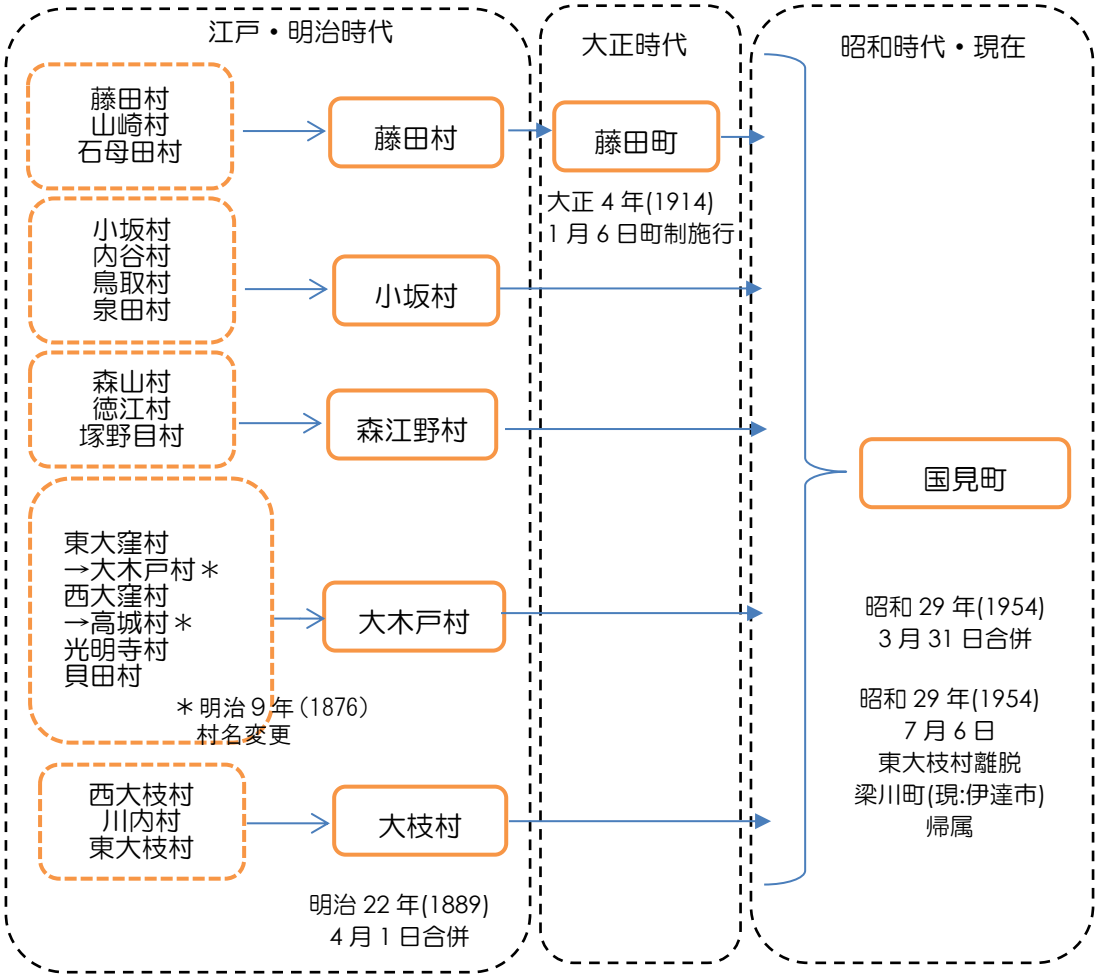


■月別平均降水量　【出典：平成 25 年国見町気象データ】

２．社会的環境

（１）町の沿革

明治時代に入ると奥州街道は、陸羽街道と改称され、一等道路に指定、明治18年（1885）には国道６号となった。また、明治16年（1883）に十一カ村戸長役場が藤田村に設置され、明治20年（1887）に鉄道（現在のJR東北本線）が開通し、明治35年（1902）藤田駅が開業、大正４年（1915）に藤田町となる。藤田町はこの地の中心として栄えた。昭和25年（1950）、藤田町・小坂村・森江野村の組合立中学校ができ、また昭和27年（1952）には、藤田町ほか１町６村の組合立藤田病院ができたことなどにより、町村合併のモデル地区と称されるようになった。そして、昭和29年（1954）県下に先駆けて、藤田町・小坂村・森江野村・大木戸村・大枝村の１町４村が合併、また同年東大枝が梁川町に編入されたことにより、現在の国見町となった。



■国見町にいたる町・村の沿革

■昭和 29 年(1954)合併前の旧町村位置図

●『国見町』の町名由来

国見とは、古来より国見山・国見峠などと称され、現在の阿津賀志山の周辺を指し、旧藤田町、旧森江野村、旧大木戸村にまたがり地名が存在した。『吾妻鏡』にも「伊達郡阿津賀志山辺国見駅」という記述がある。また、国見とは栄えゆく国を眺めるという意味から、昭和 29 年（1954）の町村合併の際、現在の町名に採用された。

（２）人口

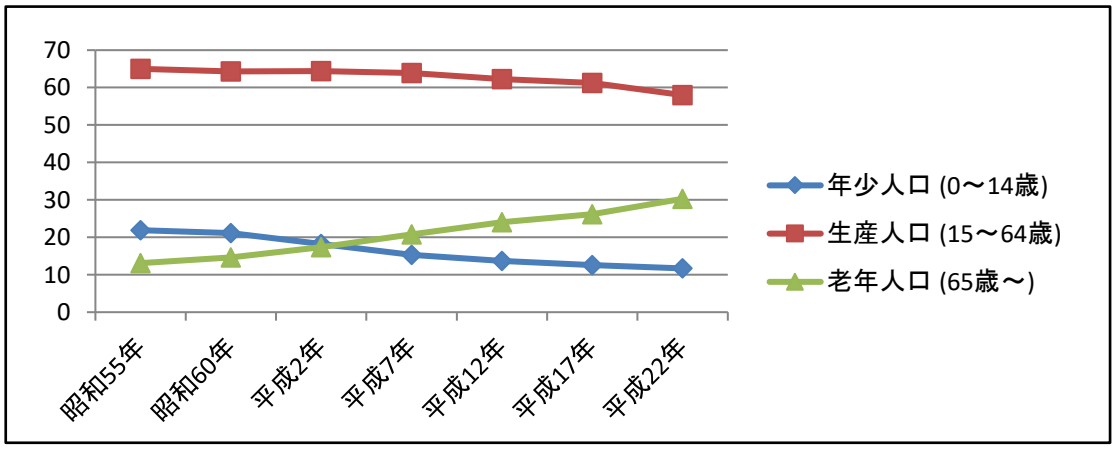
本町の人口は、平成22年(2010)10月１日時点で10,086人となっている。昭和55年(1980)以後人口は減少を続け、昭和55年(1980) からの30年間で2,000人が減少している。世帯数は同じ期間で401世帯増加しており、１世帯当たり平均で4.3人から3.1人に減少し、核家族化の傾向が顕著となっている。年齢階層別人口では、15歳未満の年少人口は平成22年(2010)で11.7%、昭和55年(1980)と比較すると約半分となり、年齢65歳以上の老年人口は倍増しており、少子高齢化が深刻な問題となっている。

また、国立社会保障・人口問題研究所が平成20年(2008)10月に公表した国見町の将来推計人口によると、10年後の平成32年(2020)には約9,000人と現在より約11%の減少とされている。このような人口の減少と急速な少子高齢化は、福祉や医療のみならず、生活文化の継承にも深刻な影響を及ぼすものと想定される。

■地区別地域・人口及び世帯（単位：人・世帯）

年　次	世帯数	人口総数	小坂		藤田		森江野		大木戸		大枝	
			世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口	世帯	人口
昭和55年	2,803	12,050	434	1,840	1,291	5,183	513	2,419	373	1,745	192	863
昭和60年	2,873	12,010	443	1,855	1,364	5,294	506	2,336	369	1,657	191	868
平成2年	2,944	11,888	449	1,822	1,416	5,190	520	2,409	367	1,614	192	853
平成7年	3,103	11,736	479	1,817	1,566	5,439	514	2,190	359	1,491	185	799
平成12年	3,141	11,198	487	1,789	1,620	5,317	501	1,999	353	1,362	180	731
平成17年	3,212	10,692	569	1,903	1,606	4,910	508	1,891	351	1,302	178	686
平成22年	3,204	10,086	622	1,933	1,670	4,911	396	1,420	336	1,181	180	641

（出典　国見町町勢要覧より）



■年齢別人口の推移（単位：%）　　（出典　国見町町勢要覧より）

（３）交通

福島盆地の北縁部に位置する本町は、中世より仙台・米沢（日本海側）へ通じる陸上交通の要衝となってきた。現在もJR東北本線、東北自動車道、国道４号が折り重なるように南北に縦断し、宮城県七ヶ宿町へ抜ける主要地方道白石国見線が東西に横断している。

国道は南北に国道４号が通り、福島県の県都福島市までは約16.5km、車で30分程度、仙台市までは約 60km、車で１時間程度の道程である。また、東北自動車道には国見インターチェンジと国見サービスエリアが整備されている。これは本町の位置が、郡山市と仙台市および福島市と白石市のほぼ中間に位置するためである。

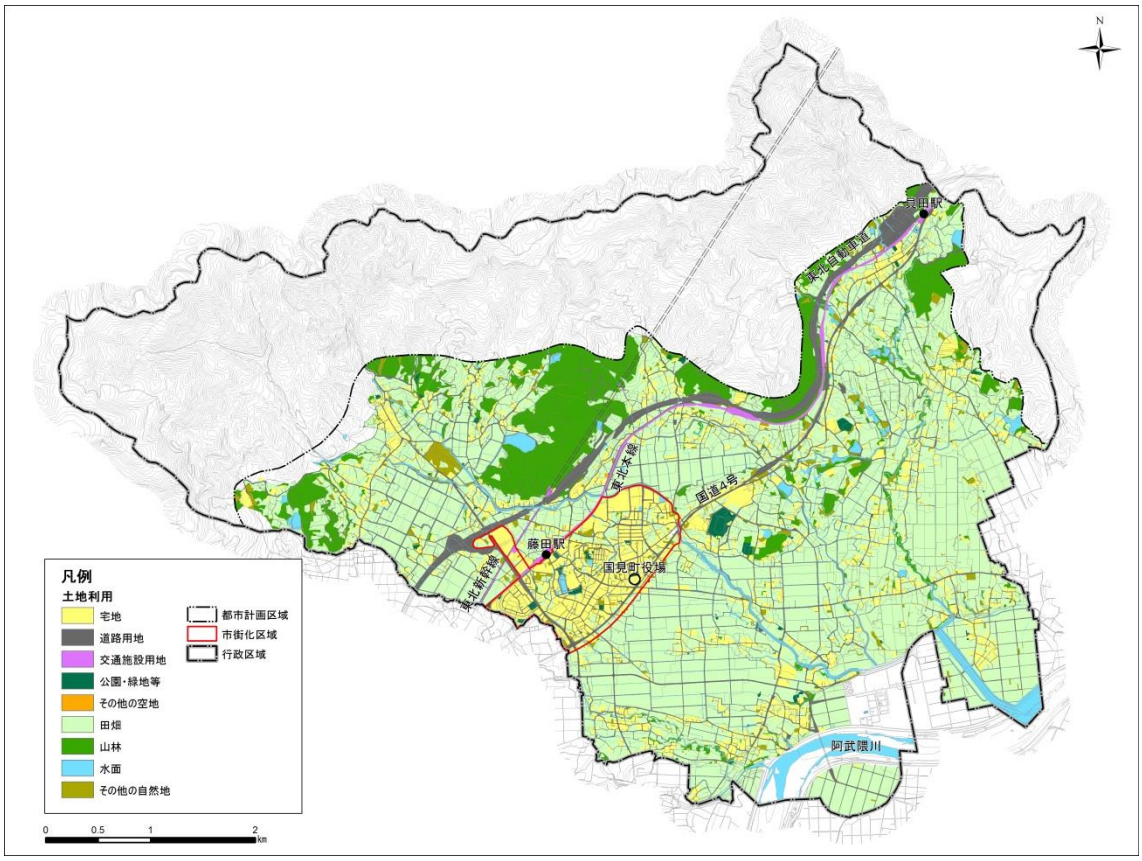
県道は、主要地方道白石国見線、主要地方道浪江国見線、五十沢国見線、赤井畑国見線、大枝貝田線があり、米沢市まで約48km車で約１時間30分、浪江町には約81km車で約２時間10分の道程である。

鉄道は、JR 東北本線が南北に通り、藤田駅・貝田駅が存在する。藤田駅より福島市には約 18 分、仙台市・郡山市までは約１時間 10 分となっており、通勤・通学の重要な駅となっている。貝田駅は無人駅であるが、大木戸地区など周辺の人々が利用している。

■国見町の主な交通網

（４）土地利用

本町全域の７割が県北都市計画区域に指定されており、区域区分に基づいた土地利用の誘導が行われている。宅地は全体の７％程度で、市街化区域内に集中して分布しており、市街化区域以外では、山林や田畑など、自然豊かな土地利用が大部分を占めている。



■土地利用状況（出典：都市計画基礎調査より）

※この地図の作成に当たっては、国土地理院の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。（承認番号平成 26 情使、第 590 号）

（５）産業

１）農業

本町の産業は、古くから農業が基幹産業である。主な平地には水田が広がる。ほとんどの農家が米の生産を行っており、現在の主な作付け銘柄はコシヒカリである。県下でも良質な米であるため、種もみとして生産する農家も多い。

また、古来より副業として養蚕業が盛んに行われていた。福島県伊達郡の養蚕業は『小手濫觴記』や『伊達濫觴記』によると、奈良・平安時代に始まったと伝えられている。その後、室町時代にも伊達氏が献上したとの記録が残り、江戸時代中期には幕府より「蚕種本場」の称号が与えられた。養蚕産業は伊達郡の代表的な産業となり明治・大正と発展してきた。しかし、大正末期生糸価格の乱高下・化学繊維の開発等による値段の下落等により

収入が不安定になると常に大きなリスクがある養蚕業のほかに、新たな生業を求めるようになった。

昭和初期より干し柿製造が始まった。干し柿は明治時代より、この地方の菓子類のひとつとして製造されてきた。皮を剥いた渋柿を、寒風の中天日に干し、一種のドライフルーツとして食べられていた。水分が抜け黒く変色し白く粉をふくものである。養蚕業をやめた養蚕住宅の二階部分は広く、風通しが良好な造りも幸いし、今まで養蚕業を営んでいた農家は干し柿作りに精を出すようになる。しかし、見た目が黒く、カビが生えたような外見は、珍味として食べられるものの、広域の流通に乗るようなことはなかった。それが、昭和初期以降硫黄燻蒸(いおうくんじょう)あんぽ柿（干し柿）製造方法が確立し、国見町でも盛んに製造されるようになった。これまでの干し柿とは違い、硫黄燻蒸をしたあんぽ柿(干し柿)は、ゼリーの様な食感であり、見た目もあめ色が美しく商品価値が高い。ここに全国へ出荷できる産業へと変遷した。

また、昭和 40 年代後半に柿の栽培のみでなく、桃栽培が始まった。本町の地質は、桃栽培に適しており、多くの農家で桃を栽培するようになり、現在では全国９位、県内３位の出荷量を誇る。「あかつき」が主力品種である。

【国見町の特産品】

米

本町は昔から米づくりが盛んで、阿武隈川流域の肥沃な粘質土壌から、８世紀頃には東北有数の条里制による水田が整備された。現在でも県下有数の種場(採種ほ場)として、良質の種もみを生産している。作付されている品種は、コシヒカリが多い。秋の収穫時期になると稲穂が垂れた田園風景が一面に広がり、黄金色に輝く。

桃

盆地特有の寒暖差が大きな気候は、国見特産の桃をおいしく育てる。今人気の「あかつき」は福島の果樹試験場（農業総合センター果樹研究所）で生まれ、とてもジューシーで果肉はやわらかく、香り高い風味を誇る。本町を代表する逸品となっている。

あんぽ柿

一つ一つ丹念に皮を剥き、独自の技術で乾燥させると甘み豊かな干し柿(あんぽ柿)ができる。本町では大粒の渋柿、蜂屋柿がよく使われ、あめ色の果肉は、ゼリーのような食感で、自然の甘さは、大地と太陽の恵みを感じさせる絶品である。

さくらんぼ

厳しい冬を越した果樹は、春一斉に花を咲かせる。そして、果物シーズンの幕開けを告げるのがさくらんぼである。

本町は、山形県東根市より栽培方法を導入以来、さくらんぼの産地である。主力品種の「佐藤錦」は手間をかけ、雨風をさえぎり、丹念に生産している。大地の恵みと太陽の力をたっぷりと受け、独自の光沢を放ち「紅いルビー」と称される。

２）商工業

平成 15 年(2003)製造業の事業所数は 29 事業所であったが、平成 23 年(2011)には 19 事業所となった。精密機械製造や繊維工業などがあったが、産業の縮小・海外へ進出などにより減少した。卸売業も平成３年(1991)は 23 事業所だったのが、平成 24 年(2012)には 15 事業所に減少している。また、町内の商店も平成３年(1991)は 167 店だったのが、平成 24 年(2012)には 100 店にまで減少している。その主な要因は、店主の高齢化や、大型のショッピングモールなどが近隣市町に出店したことによる来客数の減少などによるものである。

■産業別就業者数

産業別＼年次	昭和 60 年		平成 2 年		平成 7 年		平成 12 年		平成 17 年		平成 22 年	
	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)	人	構成比(%)
総数	6,365	100.0	6,517	100.0	6,317	100.0	6,011	100.0	5,487	100.0	4,914	100.0
第 1 次産業	1,873	29.4	1,565	24.0	1,224	19.4	1,124	18.7	1,060	19.3	877	17.9
第 2 次産業	2,179	34.2	2,430	37.3	2,385	37.7	2,136	35.5	1,579	28.8	1,376	28.0
第 3 次産業	2,311	36.3	2,504	38.4	2,703	42.8	2,747	45.7	2,846	51.8	2,621	53.3
分類不能	2	0.1	18	0.3	5	0.1	4	0.1	2	0.1	40	0.8

（出典　国見町町勢要覧より）

３）観光

本町は豊かな自然に囲まれ、全国でも有数の果物の産地である。春には、町内中心部にある観月台公園の桜が満開となり、また平地、丘陵地を問わず桃をはじめ果樹の花が咲き乱れ、奥羽山脈の緑のコントラストと合いまみえ、町内一円は桃源郷となる。本町のシンボルである阿津賀志山頂上からは福島盆地を一望することができ、眼下に広がる田園風景は、春を映す鏡のような水面、夏の緑、秋の黄金色へと日々変化する。９月23日は「くにみの日」として町全体が義経まつり等のイベント一色となり、源義経ゆかりのこの町は多くの観光客でにぎわう。

■観月台公園の桜

■桃の花

■阿津賀志山山頂からの眺望

■義経まつり
平成 25 年（2013）９月 23 日開催

３．歴史的環境

（１）原始

国見町には、旧石器時代の遺跡として、大字光明寺の県境丘陵裾の段丘に所在する滝沢遺跡があり昭和45年(1970)の道路工事でローム層中から東山型ナイフが出土している。

縄文時代の遺跡は、標高50～100ｍの洪積台地上に分布し、町内には32遺跡存在する。縄文時代前期は中山遺跡・上野台遺跡で石器がわずかに出土している程度であるが、中期になると遺跡の規模は大きくなり数も増加する。特に大字高城の岩淵遺跡では、最大規模の複式炉を持つ竪穴式住居を含む集落が確認されている。

弥生時代の遺跡は不明確なものが多いが蛤刃石斧等が発見されている。鉄器文化が徐々に伝わることに伴い、農作業の効率が向上し、現在に及ぶ稲作農業の第一歩を、踏み出したと推察できる。

■岩淵遺跡
（国見町大字高城）

■蛤刃石斧
（堰下遺跡出土）

（２）古代

古墳時代になると農耕生産はさらに発展し、階層の分化を促した。町内には塚野目古墳群・森山古墳群など、富を蓄えた豪族達が築いた５～7世紀頃の古墳が、副葬品とともに数多く残っている。また森山第四号墳の石室石材に凝灰岩が使用されており、当時から石材の採石加工が行われたことが確認できる。

古代から本地方は、陸奥国信夫郡に属し、伊達郷と呼ばれていた。８世紀頃には東北地方でも有数の規模を持つ条里制による開田が平野部で進められ、大木戸窯跡群では、須恵器が焼かれていた。平安時代になると蓮華文軒丸瓦を出土する徳江廃寺が創建され、高城の山居遺跡では製鉄が行われていた。

10世紀になると伊達郷ほか２郷は信夫郡から分離し、伊達郡が設置され、平安時代末には藤原氏の支配下に置かれた。この時期に造営された堰下古墳経塚からは、洲浜双鳥鏡が出土し、12世紀後半におけるすぐれた工芸品が伝わっている。

■円筒・朝顔形埴輪
（塚野目第一号墳出土）

■州浜双鳥鏡
（堰下古墳経塚出土）

【奥州合戦と阿津賀志山防塁】

文治５年（1189）源頼朝は、奥州平泉の藤原泰衡を討伐するため、白河の関を越え、８月７日伊達郡の藤田宿へ着陣した。

藤原秀衡亡き後、その跡をついだ藤原泰衡は、すでに頼朝の弟義経を衣川の館にて自刃さ

せており、恭順の態度を示していた。
しかし頼朝の大動員の報に接し、この事態を察知していた泰衡は、鎌倉軍の侵攻を阻止すべく、阿津賀志山に堅固な防塁を築き、迎撃の態勢をとった。この二重の堀が現在も一部残っている阿津賀志山防塁である。『吾妻鏡』には「*阿津賀志山に城壁を築き要害を固む、国見の宿と彼の山の中間に、口五丈の堀を構え、逢隈河の流れを堰入れ柵として、異母西木戸太郎国衡を大将軍と為す*」と記載がある。

■阿津賀志山防塁
阿津賀志山側から東に望む。現代においても、土塁と空堀が原型をとどめている。日本三大防塁の一つ。

阿津賀志山防塁は、阿津賀志山の中腹からほぼ滑川にそって、当時の阿武隈川岸に達する約3.2kmにわたって構築されていた。この防塁の構築に要した労働力は、延べ人数で約25万人と見積られている。

文治５年(1189)８月に頼朝が中央を進む「大手軍」、太平洋岸を進む「東海道軍」、日本海側から攻め込む「北陸道軍」の３隊にわけ、その総勢は30万人以上に達した。

『吾妻鏡』によれば戦いは８月８日より始まり、鎌倉軍はわずか３日間でこれを制した。これは、鎌倉軍の別動隊が大きく迂回して奥州軍の後陣を奇襲し、奥州軍は混乱し、態勢を立て直せないまま敗北を喫したためである。

総大将であった藤原国衡は和田義盛・畠山重忠らに討ち取られた。その後泰衡は、蝦夷地（北海道）に向けて逃亡したが、途中で家臣に殺害され奥州藤原氏は滅亡した。

これにより藤原氏の奥州支配は終わりを告げる。奥州合戦の戦功として伊達郡を与えられた伊達朝宗（常陸入道念西）は、常陸国より移住し伊達氏を称し、鎌倉時代から室町時代にかけて、伊達郡は伊達氏の支配下に置かれた。

（３）中世（伊達氏支配の確立へ）

奥州藤原氏の平泉政権没落後は、頼朝は多くの有力御家人を地頭として任命し、郡庄の行政事務を行わせた。その主な職権は「領域内の公田の把握、所当公事の収納、庶民の相論（雑人訴訟）の裁判、寺社造営役の催促」とあり、奥州合戦に功のあった伊達朝宗の一族も、伊達郡を与えられて常陸国から下向し地頭として支配を行った。伊達氏の居城は、桑折町・伊達市梁川町などを転々としながら、支配を固めていくこととなる。

豊かな湧水があった光明寺・森山・泉田・内谷地区などでは、水路やため池などのかんがい施設が整備され生産力の基盤が強化されていった。また光明寺地区では、伊達五山の一つとして「光明寺」が建立されるなど、伊達氏の庇護のもと寺院の整備がなされた。

以後も多少の変動があったものの伊達氏の支配が続いていたが、中世末期となると、天

文の乱(1542～1548年)など伊達家内部や領主間の争いが続き、伊達氏は本拠地を伊達郡から米沢へ移すこととなる。

伊達輝宗、伊達政宗の時期になると、相馬氏との抗争が絶えず、伊具地方がその戦場となった。米沢方面に通じる小坂峠への道と、奥州街道の分岐点を擁し、さらには伊具方面にも連絡できるこの地（国見地域）は、交通上・軍事上の重要性を増していった。その後、天正17年(1589)政宗は、相馬氏との抗争に勝利し、福島県会津地方の蘆名氏を大敗させ、中南奥羽の覇権を確立した。その後豊臣政権による天正18年(1590)「奥羽仕置」が実施され、中世の終焉を迎える。

（４）近世

豊臣秀吉の「奥羽仕置」の結果、伊達郡は新しい領主蒲生氏郷の所領として編入された。その後、慶長３年(1598)に上杉景勝へと領主が移り、検地や街道・宿場の整備が進められる。寛文４年（1664）に幕府直轄領（天領）となり、伊奈半左衛門・国領半兵衛などの代官による支配を受けることになる。その後本町では、本多家(福島藩)・松平家(桑折藩・篠塚藩)・佐渡奉行(天領)・仙台藩預・木下家(足守藩)などと領主が変遷。幕府直轄地として幕末を迎える。

江戸時代の本町では、２つの街道と阿武隈川の舟運による物流の活況や半田銀山の操業、養蚕業の勃興、西根堰の開削による農業の伸長により発展する。しかし、伊達郡一円支配から領域が村ごとに細分化され、天明年間の大飢饉などにより農民層の分化が進む。また、寛延２年(1749)の農民一揆や慶応２年（1866）の世直し一揆など大規模な騒動により幕藩体制は大きく揺らぐ事件も発生した。

■西大枝深山神社廻米絵馬

■元禄 11 年(1698)貝田村絵図
(県庁文書 1983「若松城地関係其ノ他」より)
※福島県歴史資料館寄託

【街道・宿の成立】

江戸時代の幹線道路である奥州街道は、江戸から陸奥三厩（青森県）まで続き、陸奥・出羽・松前諸大名の参勤交代の主要街道として、宿場町の整備が行われた。

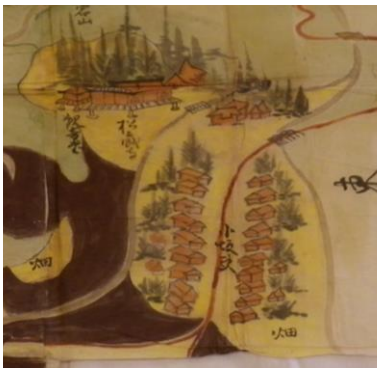
伊達・信夫両郡には12の宿駅が置かれた。主要宿駅には本陣・脇本陣が設置された。また、名主・組頭・百姓代の村役人のほかに、宿役人として年寄・検断・問屋が置かれた。奥州街道を登るのは松前・八戸南部・盛岡南部・一関田村・仙台伊達の諸大名であり、桑折宿において、七ヶ宿をとおる出羽・津軽の大名十三家がこれと合流する。

■天保年間(1830～1844)
藤田村絵図

本町には、奥州街道貝田宿・藤田宿、羽州街道小坂峠の登り口にある小坂宿があった。

藤田宿は、大名や公用役人の宿泊は少なく、一般の庶民や公用ではない武士が宿泊する旅籠が並び立ち、商人農民の憩いの場所でもあった。享和４年（1804）頃には、藤田宿の旅籠・揚屋には多くの飯盛女を抱え、桑折宿や近郷からの者が投宿したと考えられている。

明治10年（1877）頃には、旅籠16戸、料理屋11戸があり、大いににぎわい、毎月１の付く日と６の付く日に市が立った（六斎市）。



■小坂村絵図（江戸時代後期）
（「小坂区有文書」より）
※福島県歴史資料館寄託

貝田宿と小坂宿は、ともに峠を隔てて仙台藩領に接する境界の宿であったことから、小規模な宿場であるものの口留番所が置かれ取り締まりが行われていた。口留番所付近の道は鍵型に折れ曲がり、町尻に寺院が整備されるなどの特徴を持つ。小坂宿では、小坂峠を背後に持つことから、旅人の旅籠や険しい峠道を上るための牛宿などが軒を並べ、参勤交代の大名達も休息に用いた。

（５）近代

近代国家が成立する過程にあって、国見町においても目まぐるしいまでの制度変化に、住民は大きな戸惑いを感じていたと考えられる。まず明治４年から９年（1871～1876）頃までに地租の改正が行われた。それぞれの村で実測調査が行われ、さながら明治の総検地といった状況であった。

明治22年（1889）市制・町村制の施行により小坂村・藤田村・森江野村・大木戸村・大枝村が成立。これに伴って村議会議員が選出され村議会が誕生した。

一方で、実際の国見町の農村部の生活は、明治20年代の小作地率が36％に達していることから、この時点で小作化が相当進んでいたと思われる。その後、大正５年（1916）までさらに小作化が進んでいる。

■国見町小作地率表（国見町史より）

年代	自作地	小作地	小作地率
明治26年（1893）	7,799反	4,307反	35.6％
明治35年（1902）	8,792反	5,963反	40.4％
明治43年（1910）	9,167反	6,159反	40.1％
大正5年（1916）	8,912反	7,218反	44.7％

※明治30年代は開墾が進んだ時期であるのを勘案すると、小作地率自体が変わらないように見えるが、実態は小作地自体多くなっており、小作化が進んでいる。

【石蔵の普及】

本町には、「国見石」と呼ばれる凝灰岩が広範囲に分布・露出し、古来より採石を行ってきた。これらは、石工により加工され様々な用途で使用された。大正から昭和初期に、豪農・豪商による石蔵建築材として使用されたが、戦後、昭和30～40年（1960～1970）に採石が盛んに行われ、石蔵が一般にまで普及し町内の全域で建築されるようになった。現在も町内には多種多様な石蔵が多く残る。

【豪商の誕生（奥山家）】

明治期に本町において豪商が生まれた。藤田の宿場で初代奥山忠左衛門は奥山呉服店を創業、東京から仕入れた呉服類を手広く販売、売り上げを伸ばした。明治４年（1871）１月の藤田村内売上では第２位の実績を残している。２代目忠左衛門は呉服店をさらに拡張、同時に農地を広く取得し、金融業も始める。３代目忠左衛門は、土地の取得を更に拡大、同時に貸家業を始めた。また、奥山合名会社を設立し、金融業を更に拡大、北海道の胆振地方鵡川村の山林を買収する。さらにJR藤田駅と第百七銀行藤田支店の誘致に尽力するなど奥山家は３代目で隆盛を極めた。

（６）国見町にかかわる主な人物

１）大野東人（奈良時代　？～742年頃）貴族

奈良時代の貴族。壬申の乱で活躍した果安の子、和銅７年（714）迎新羅使として初めて記録に登場する。国見町鹿島神社の縁起によると、「奈良のころ陸奥の国の蝦夷征伐のため東征を行い、守護神として常陸鹿島明神を勧請し藤田宿に来る。当時阿津賀志山周辺の蝦夷人に対し藤田源宗山にて舘や柵を築き蝦夷攻略の本拠とした。」とある。

天平12年（740）に都に戻り、翌年平城京留守役に任命されるが、天平14年（742）に没する。

２）藤原泰衡（1155年もしくは1165年～1189年）武将

奥州藤原氏、３代秀衡の子。異母兄に国衡。

源頼朝からの要請に屈し、平泉に逃れていた義経を、自害へと追い込む。その後頼朝が、奥州征伐の兵を上げると、阿津賀志山から阿武隈川に至る全長3.２ｋｍの防塁を築く。ここで頼朝軍を迎え撃ったが４日程度の戦闘で陥落。以後散発的な戦闘を行うが、平泉が落ち、現在の秋田大館市付近まで敗走の後、家臣の裏切りに遭い殺害される。

■藤原泰衡(中央)

(源義経公東下り絵巻「平泉入り」より)

※中尊寺所蔵・許可

３）伊達朝宗（鎌倉時代　？～1199年）武将

『吾妻鏡』によれば文治５年（1189年）の奥州合戦に際して石那坂の戦い（福島市）で息子の為宗・為重・資綱・為家と共に奥州藤原氏の配下佐藤庄司を討ち取り、武功を立てた。

これにより、源頼朝より伊達郡を賜る。朝宗は、これまでの伊佐、或いは中村の姓を改め以後、伊達を称することになった。これが伊達氏の始まりとなる。

■伊達朝宗像

※仙台市博物館所蔵・許可

４）松尾芭蕉（1644年～1694年）俳人

元禄２年（1689）３月に弟子の曾良を伴い、『奥の細道』の旅に出る。同年６月７日に白河の関より福島域に入り、本町には同月17日から19日頃に到着。

同じ東北でも直轄地や譜代大名の領地であった福島域から宮城域（外様大名仙台伊達藩）へ入ることは、本格的な「みちのく入り」の感を持ったことだろう。

『奥の細道』には、「*羈旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路にしなん、是天の命なりと、気力聊とり直し、路縦横に踏で伊達の大木戸をこす*」と記されている。

■松尾芭蕉と曾良

（米倉兌 作「奥の細道 伊達の大木戸」より）

※伊達市教育委員会所蔵・許可

５）奥山忠左衛門（３代目忠左衛門）（1859年～1929年）

豪商・政治家

旧梁川村（現伊達市）にて生まれる。明治10年（1877）に２代目奥山忠左衛門の養子となり一人娘イシと結婚する。奥山家は代々呉服屋や貸地業を営んでいたが、３代目より貸家業、金融業など事業を拡大、県下有数の豪商となる。

その間、県会議員や藤田町長（現国見町）などを歴任した。旧藤田宿の中心にある奥山家の敷地内に荘厳な洋館を建築した。また藤田駅の誘致や銀行の建設に奔走し、本町の近代化・発展に尽くした。

■奥山忠左衛門肖像画

６）菅野喜三郎（1873年～1958年）政治家

旧小坂村内谷の床屋の末子で内谷村の村長をつとめた父末吉と、五十沢村の旧家から嫁いできた母トラの長男として明治６年（1873）８月22日に生まれた。

日清、日露戦争ともに仙台歩兵第４連隊で後方勤務。復員後は小坂村村会議員、内谷区長、村助役、伊達郡会議員、公立福島病院議員、大正12年（1923）９月に県会議員となる。名誉職参事補充員に選任される。地元の養蚕業の振興に生涯をささげた。

■菅野喜三郎

７）伊藤柳太郎（1877年～1949年）石工職人

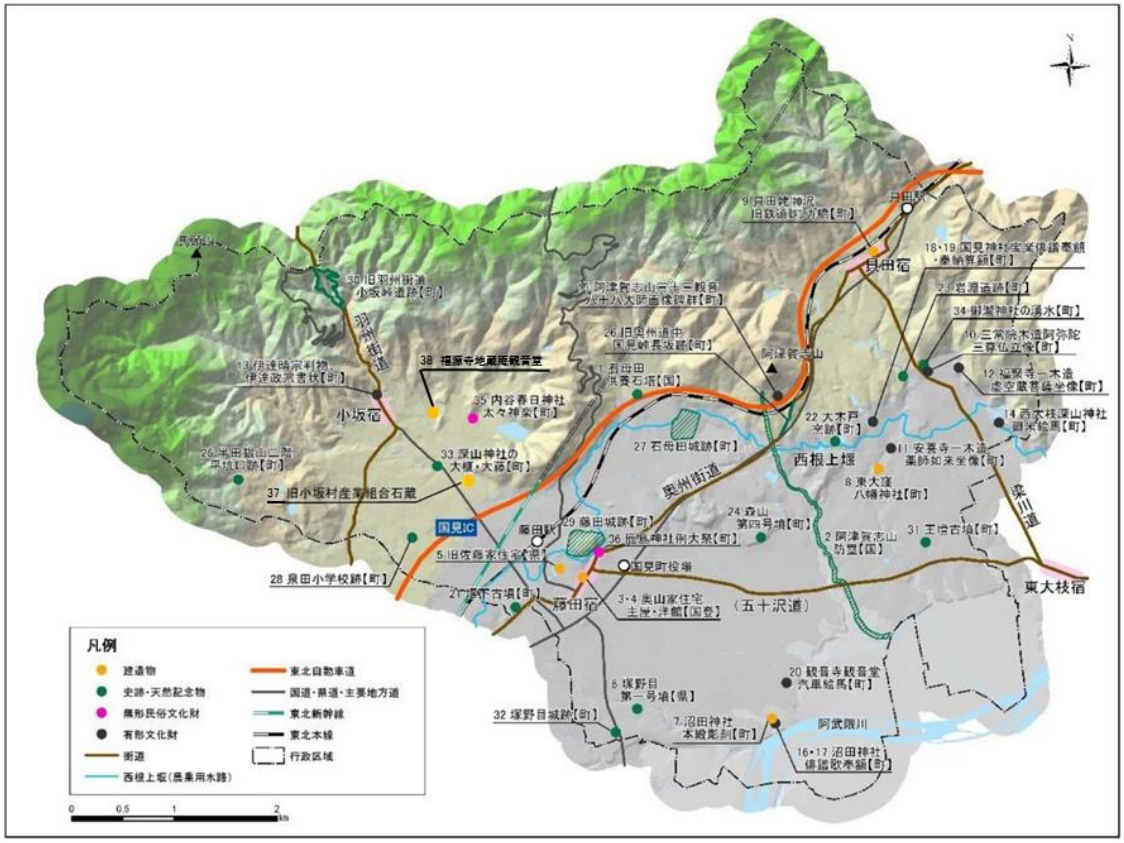
旧藤田村石工職人中野政造の次男として生まれる。幼い頃より石工職人の父の手伝いをし、石工技術を身につける。成人すると大工の家柄である伊藤家に養子として入り、大工技術を習得する。その後、栃木県宇都宮市大谷の石工から最新の技術を学んだ。

その後、自身の敷地に国見町内で国見石を使用した第１号となる石蔵を建築し、石蔵建築の先駆となる。今なお町内には国見石使用の蔵が多数ある。

■伊藤柳太郎肖像画

４．文化財の分布状況

国見町には、史跡２件、登録有形文化財（建造物）５件、県重要文化財(建造物)１件、県指定史跡１件、その他町指定文化財31件が所在している。



■国見町内指定文化財の分布状況

※この地図の作成に当たっては、国土地理院の承認を得て、同院発行の基盤地図情報を使用した。（承認番号　平成26情使、第590号）

■国見町内指定文化財一覧

指別	No.	種　別	指定登録日	名称	所在地
国	1	史跡	S.10.6.7	石母田供養石塔	石母田字中ノ内
	2	史跡	S.56.3.14	阿津賀志山防塁	大木戸、石母田、西大枝
国登	3	登録有形文化財（建造物）	H.10.4.21	奥山家住宅主屋	藤田字北
	4	登録有形文化財（建造物）	H.10.4.21	奥山家住宅洋館	藤田字北
	39	登録有形文化財（建造物）	R.4.10.31	松田家住宅主屋	貝田字町裏
	40	登録有形文化財（建造物）	R.4.10.31	松田家住宅土蔵	貝田字町裏
	41	登録有形文化財（建造物）	R.4.10.31	松田家住宅表門及び板塀	貝田字町裏
県	5	重要文化財（建造物）	S.47.4.7	旧佐藤家住宅	藤田字観月台
	6	史跡	S.59.3.23	塚野目第一号墳	塚野目字前畑
町	7	有形文化財（建造物）	S.58.3.3	沼田神社本殿彫刻	徳江字沼田
	8	有形文化財（建造物）	H.5.10.1	東大窪八幡神社	高城字前
	9	有形文化財（建造物）	H.25.10.30	貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋	貝田字寺脇
	10	有形文化財（美術工芸品）	S.60.3.15	三常院木造阿弥陀三尊仏立像	光明寺字鹿野
	11	有形文化財（美術工芸品）	H.5.10.1	安養寺一木造薬師如来坐像	高城字北
	12	有形文化財（美術工芸品）	H.5.10.1	福聚寺一木造虚空蔵菩薩坐像	光明寺字沼
	13	有形文化財（古文書）	S.60.3.15	伊達晴宗判物、 伊達政宗書状	小坂字小坂
	14	有形民俗文化財	S.58.3.3	西大枝深山神社の廻米絵馬	西大枝字宮ノ内
	15	有形民俗文化財	S.44.6.30	阿津賀志山三十三観音 八十八大師画像碑群	大木戸字阿津賀志山
	16	有形民俗文化財	H.5.10.1	沼田神社再建遷宮祝 排諧歌奉額	徳江字沼田

	17	有形民俗文化財	H.5.10.1	沼田神社南藤堂武俊 七十齢賀寿俳諧歌奉額	徳江字沼田
	18	有形民俗文化財	H.5.10.1	国見神社宝楽俳諧奉額	高城字国見
	19	有形民俗文化財	H.5.10.1	国見神社奉納算額	高城字国見
	20	有形民俗文化財	H.5.10.1	観音寺観音堂汽車絵馬	徳江字団扇
	21	史跡	S.48.3.10	堰下古墳	泉田字堰下
	22	史跡	S.48.3.10	大木戸窯跡	大木戸字中野窪
	23	史跡	S.51.2.26	岩淵遺跡	高城字岩渕
	24	史跡	S.60.3.15	森山第四号墳	森山字上野薬師
	25	史跡	S.60.3.15	半田銀山二階平坑口跡	泉田字二階平
	26	史跡	S.60.3.15	旧奥州道中国見峠長坂跡	大木戸字長坂
	27	史跡	S.60.3.15	石母田城跡	石母田字舘ノ内
	28	史跡	H.5.10.1	泉田小学校跡	泉田字立町
	29	史跡	H.5.10.1	藤田城跡	山崎字宮舘
	30	史跡	H.5.10.1	旧羽州街道小坂峠道跡	鳥取字峠下
	31	史跡	H.5.10.1	王壇古墳	西大枝字王壇
	32	史跡	H.25.10.30	塚野目城跡	塚野目字舘前
	33	天然記念物	S.49.3.1	深山神社の大榧大藤	鳥取字深山
	34	天然記念物	H.5.10.1	御瀧神社の湧水	光明寺字滝沢
	35	無形民俗文化財	S.60.3.15	内谷春日神社太々神楽	内谷字舘脇
	36	無形民俗文化財	H.26.12.15	鹿島神社例大祭	藤田字北
	38	有形文化財 （建造物）	H30.3.13	福源寺地蔵庵観音堂	鳥取字鳥取

（１）史跡及び登録有形文化財

史跡は、石母田供養石塔と阿津賀志山防塁の２件、登録有形文化財（建造物）は、奥山家住宅主屋・洋館と松田家住宅主屋・土蔵・表門及び板塀の５件である。

■石母田供養石塔（史跡）

徳治３年(1308）に僧智瑄（ちせん）が、先祖の追善供養に建立した板碑で、梵字と功徳文が刻まれている。銘文は元の帰化僧寧一山の筆跡で、鎌倉時代における禅密合一の思想を表現した特異なものである。地元では俗に「蒙古の碑」と呼ばれ、周辺は満福寺跡といわれている。

■阿津賀志山防塁（史跡）

東北を支配した奥州藤原氏と源頼朝率いる鎌軍が対峙した、文治５年（1189）阿津賀志山の合戦の古戦場跡。東北全域で展開された奥州合戦における最大の激戦地となり、奥州藤原氏により阿津賀志山中腹から、阿武隈川の旧氾濫原まで3.2kmにわたり築かれた堀と土塁からなる要塞施設。地元では二重堀（ふたえぼり）と呼ばれ守られてきた。

■奥山家住宅主屋・洋館（登録有形文化財）

大正10年（1921）に和館・洋館からなる迎賓館として建設された。

建設費は当時10万円で建坪は約100坪。建物の後方に千俵蔵など大小合わせて５つの蔵が、主屋を取り囲むように配置されていた。洋館は木骨石造で、壁材に国見石が用いられ、表面はタイル貼りとなり、八角形の塔を備えた特徴的な建物である。

■松田家住宅主屋・土蔵・表門及び板塀（登録有形文化財）

奥州街道の旧貝田宿に位置する大型養蚕民家。街道側を入母屋造として家の構えとし、反対側を切妻造で棟に煙出しを設け、養蚕のための造りとする。大火後の建築のため軒裏まで漆喰で塗込め、雨戸や戸袋を鉄板張とし、厳重に防火に備え、独特な外観を呈する。伝統芸能の発表会を行うなど、活用に取り組む。

（２）県指定文化財

■旧佐藤家住宅（県重要文化財）

江戸時代中期のこの地方における本百姓の標準的な住居である。この建物は国見町大字小坂字木八丁にあったもので、昭和47年（1972）に現在地（大字藤田字観月台）に移転復原された。間取りは単純で、広い土間、大黒柱や曲木を用いた梁、三方大壁の手法や出入口の大戸など、古い建築様式が残されている。

■塚野目第一号墳（県指定史跡）

５世紀の中頃に築造された前方後円墳。昭和50年（1975）に発掘調査が行われ、主軸の長さ約70ｍ、後円部の直径約52ｍ、高さが６ｍで前方部が短い特徴を持つ。周りには、幅７～８ｍ、深さ1.5ｍの溝が巡らされ、多量の円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。

（３）主な町指定文化財

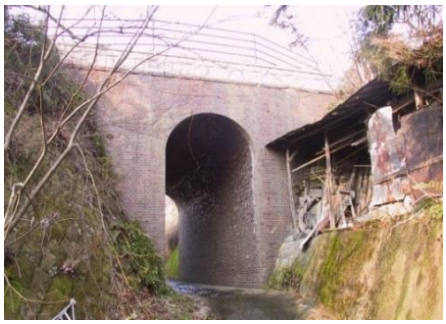
■沼田神社本殿彫刻（町有形文化財）

徳江の旧河岸跡近くにある沼田神社本殿の彫刻は、全面透かし彫りの見事な装飾が施されている。伝えによると、伊達郡高成田村仏師長谷川雲橋、雲谷親子が弘化年間（1844～1847年）頃に制作したものであるとされている。

■貝田姥神沢旧鉄道レンガ橋（町有形文化財）

明治20年（1887）に開業した現在のJR東北本線（黒磯～塩釜間）当初の鉄道橋。排煙を原因とする大火災が地区で度々発生したため、大正年間に路線の変更が行われた。

東北の近代化を支え、貝田の町並みとも大きく関わる鉄道遺産である。



■岩淵遺跡（町史跡）

岩淵遺跡は、高城にある縄文時代中期の集落跡。直径7.4mの平面円形状の竪穴式住居跡が確認され、内部には直径3.2mの大型複式炉が出土した。

現在、竪穴式住居１棟が復原されている。

■旧奥州道中国見峠長坂跡（町史跡）

江戸時代の奥州道中における要衝の地にあって、険阻な山坂として著名な国見峠の難所跡が遺されている。多くの大名や旅人が往来し、松尾芭蕉も「奥の細道」で旅の辛さを記している。

深緑の中に掘り割り状の道跡が約400m続く。

■旧羽州街道小坂峠道跡（町指定史跡）

小坂峠（標高441m）は国見町と宮城県白石市との境に位置し、近世において出羽国諸大名の参勤交代や御城米の輸送等に利用された街道跡である。

旧道の東側には慶応２年(1866）に開削した新道がある。現在の小坂峠越えの道路は昭和47年（1972)に完成した主要地方道白石国見線である。

■深山神社の大榧（かや）大藤（町天然記念物）

昭和49年（1974）に町の天然記念物に指定。

大榧（おおかや）は、根回り４m、枝の張り出しは15mもある大樹である。

樹齢500年以上と考えられる大藤は、大榧全体に巻き付いており、５月中旬頃に藍色の藤の花が一斉に咲き、滝のような鮮やかさである。

■御瀧神社の湧水（町天然記念物）

この湧水は、御瀧神社の境内に湧き出ており、古くから地域住民の憩いの場として親しまれている。また四季を通して、水量が豊富で地域の生活用水や水田のかんがい用水として広く利用されている。

「福島の水三十選」に選ばれている。

（４）指定以外の文化財等

■阿津賀志山

阿津賀志山は、福島県と宮城県の県境に位置する標高289mの山である。小中学校の校歌で歌われ、野外活動や遠足などでも登り、町のシンボルとなっている。

また毎年12月23日から「あつかし山ビッグツリー」と称して山頂にライトが灯される。

※山頂から山麓にかけての一部は、阿津賀志山防塁として史跡指定がされている。

■中尊寺蓮

中尊寺蓮は、奥州藤原泰衡の首桶にあった蓮の種を現代に蘇らせたもので、岩手県平泉町中尊寺より平成21年（2009）に譲り受けた。毎年７月頃になると濃い緑の中に、鮮やかなピンクの花がいくつも現れる。

■伊達朝宗（ともむね）夫人墓

文治５年(1189)奥州合戦の功績により伊達郡をあたえられた伊達氏初代当主朝宗の夫人の墓。周辺は、夫人の菩提寺として存在した光明寺（伊達五山の一つ）を中心に整備され、伊達氏の庇護を受け栄えた。

■西根上堰（うわぜき）

寛永10年（1633）に完成した全長約28kmの農業用水路。福島市(飯坂)・桑折町・国見町を経て伊達市五十沢に至り、当時の29カ村を潤した。工期は８年で、標高差わずか50mという高い土木水準で設計された。平成22年度には、土木学会選奨土木遺産に認定された。

■最禅寺

天正16年(1588)または寛永３年(1626)に開山されたと伝わる曹洞宗の寺院である。現在の本堂は明和２年(1765)に造られた。本堂の中には本尊とともに、柿葺の小さな観音堂が安置されている。

今でも観音信仰が残されている。

■お盆供え物

大字徳江を中心に、毎年８月13・14・15日のお盆に仏壇に提灯をぶら下げる。家によっては新たに簡易の仏壇盆棚を設えるところもある。

蓮の葉に乗せた料理を供え、柳の枝のはしを準備する。供え物にはそうめんなどが一般的で魚や肉類は供えない。14日の朝は仏壇と同じ供え物を食す。